



爪切り

【長野県】土屋 操 51歳

10年以上も所属した部署から、気持ち新たに脳外科病棟に異動になった。看護師経験はだいぶ長くなったけれど、脳外科は未知の世界。長くなった看護師経験の中で聞いたことのある言葉の意味が、ベッドサイドにうかがうことで初めて知識と実際の症状と結び付く、そんな状況でいた時に出会ったMさんとの関わりがある。脳梗塞を発症したMさん。麻痺はほとんどなく、運動レベルに問題はなかったが、失語症が残った。周囲の状況は理解できているのに、思い、考え、気持ち……全てが言葉にならない。

「声にならないMさんの言葉を感じたい」。そんな気持ちで訪室した時のこと。「うー」「あー」と

涙ぐみ、頭を抱えて俯いてしまうMさんの手に何げなく触れた時、爪が伸びていることに気が付いた。「爪を切りましょうか……ね」。落胆しているMさんに掛ける言葉が見つからず、ただそのままを口にしてみた。驚いた表情で自分の両手をまじまじと見つめていたMさんの爪を切り終えた時、Mさんは私の両手を掴み、自分のおでこを摺り寄せた。何度も何度も「あー」「あー」と涙ながらに発声を繰り返した。私はMさんからの「ありがとう」を体で感じた。

「爪切りの日」以後、Mさんは私を手招きで呼ぶようになった。言葉での会話はなかったけれど、Mさんと通じ合える時間があつたりハピリ室へは2人で手をつな

いで歩いた。時間を重ねるうちにときどきMさんは友だちから届いた手紙を私に差し出し、「読んで欲しい」と伝えてくるものがあつた。私の顔をのぞき込んだり、感慨に耽るあまりあふれる涙を拭いたり、時には眼を丸くしながらさざまな仕事で聞いているMさんを目の当たりにし、私が言葉に対する壁をつくっていたことに気付いた。患者さんが「伝えよう」としているサイン。その何倍もの「聴き取るう」とするサインを体で患者さんに伝えることが、見て、聴いて、触れて、感じる看護だと思う。